古くなったり、もう使われなくなったりした建物が生まれ変わり、そこに新しい価値が加わる。すると、にぎわいが生まれたり、思いがけない人と人との繋がりができたり。そんなまちを面白くするリノベーションが、今、岐阜のあちこちで始まっています！

リノベーションが まちを面白くする！

ロイヤル40を背景に、和やかに整列。左からSIKAKU／四角商店の佐久間さんと木下さん、PENGUIN BOOTSのすぎやまさん、ツバメヤの岡田さん、ミユキデザインの末永さんと大前さんとたまちゃん、ティダティダの水野さん、スロメの西尾さん

Renovation ❶

築40年のビルの再生が、
柳ケ瀬に新しい風を起こす。

岐阜市

ロイヤル40

柳ケ瀬商店街にあるロイヤルビルは、全国的にも珍しいフィルム上映をする映画館が残る商業ビルだ。入り口には昭和の銀幕スターが描かれた看板が掲げられ、年配者は懐かしそうに、若者は物珍しそうに足を止めてそれを眺める。築40年以上が経ち、時代とともに空き店舗が目立ち始めていたが、平成28年にビルの大部分がリノベーションされ、『ロイヤル40（ヨンマル）』としてテナントの募集が行われた。翌年のグランドオープンまでに、1階には飲食店やセレクトショップ、雑貨屋、インテリアショップなどが次々と開店、らせん階段を上った2階のフロアにも、5つの区画に缶バッジの制作やシルクスクリーン印刷が体験できるショップ、ギャラリーなどが出店し、建物が一気ににぎわった。そして、その個性的な数々の店を目当てに、それまでの商店街の客層とは違う若い世代や親子連れが柳ケ瀬を訪れるようになり、界隈にも変化と活気がもたらされた。

このロイヤル40のプロジェクトの仕掛人は、建築デザイン事務所「ミユキデザイン」の大前貴裕さんと末永三樹さん夫妻だ。二人は美殿町にあるシェアオフィス「まちでつくるビル」や神田町通りのアトリエビル「カンダマチノート」などのプロデュースを手掛けてきたほか、毎月第3日曜日に柳ケ瀬で開催されるイベント「サンデービルヂングマーケット」の企画・運営を行うなど、関わるプロジェクトは建築に限らず、多岐にわたる。

「私たちの中では、小さな道具から部屋、家、まちまでがみんな繋がっていて。特に境界は設けず、自分たちが楽しい、面白いと思うことをやってるんです」。

ミユキデザインがこの数年、積極的に取り組んでいるのが〝リノベーションまちづくり〟だ。これは空き家や空きビルなどの遊休不動産をリノベーションして活用し、まちを元気に面白くすること。そこで、二人にとって身近な〝まち〟である柳ケ瀬でうまく活用されていなかったロイヤルビルに着目した。

「リノベーションって単なる改修ではなくて、そこに新しい価値を与えることなんです。もともとその土地や建物にある価値、魅力を探り当ててブランディングしたり、デザインしたり。ダイヤの原石を見つけて磨くような感じです」。

ロイヤルビルの1階は、多くの店舗の入口がビルの内部ではなく路面に向けて設けられけていて、通りがかった人を呼び込みやすい。そういった商店街ならではの建物の造りを生かし、立ち寄りやすいオープンな印象を大切にした。一方で2階は若い人たちが起業する拠点にしてもらいたいと、賃料を抑えるために広いスペースを小さな区画に分けた。そうした建物が持つ特性を見極めるだけでなく、そこにどんな人が集まり、どんな空間になってほしいのかという未来のビジョンを具体的に描き、それを実現するために最善な方法を理論的に突き詰めた上で、リノベーションをしているのだ。

2階でオリジナルブランドの服や缶バッジ、布地などを販売する「PENGUIN BOOTS（ペンギンブーツ）」を営むすぎやまえみこさんは、〝ここにしかない、ここでしか体験できないこと〟があるのがロイヤル40の魅力だと話す。画一化されたショッピングモールで大量生産されたものを買うのとはまた違う、この場所ならではのユニークな店の集まり、作り手の顔が見える商品、いろんな人との出会い。それが人を惹きつける。さらに、店を構えて1年が経ち、柳ケ瀬が少しずつ変わっている実感があるとも言う。「新しいお店がいくつも増えているのを見ると、自分も頑張らなくちゃと思います。柳ケ瀬を〝オワコン（終わったコンテンツ）〟だと思って、何年も来ていない人にこそ、ぜひ来てほしい」。

このビルをロイヤル40として再生するための母体として、平成29年に設立された「柳ケ瀬を楽しいまちにする株式会社」。その代表取締役を務める岡田さや加さんは、20代の頃から柳ケ瀬で飲食店を経営し、ロイヤルビルにある和菓子屋「ツバメヤ」のオーナーでもある。「今は古い建物を壊して新しい建物をどんどん造る時代ではなく、そこにある建物をリノベーションして新しい役割を与え、活用していく時代。このビルは〝柳ケ瀬再生のシンボル〟なんです」。

リノベーションがまちの景色を変え、人の流れを変え、少しずつにぎわいを生み出し、まさに〝柳ケ瀬を楽しいまちに〟していく。

つい柳ケ瀬に行きたくなる 個性的な人やものが集まるビル。

柳ケ瀬商店街の中にあるロイヤルビルの1・2階で営業する、美味しいものや楽しいこと、素敵なものに出合える13のショップが『ロイヤル40』。ビル内には昭和の面影が残る映画館や喫茶、カルチャーセンターなどもある。

1F ／ツバメヤ（和菓子）、ティダティダ（ごはんとおやつ）、アイスクリーム松ノ屋（アイス）、BLUE BLUE GIFU（ファッション）、ぶびんが（雑貨）、EUREKA SATELLITE STORE（ファッション）、SIKAKU ／四角商店（インテリア）、MAGIC HOUR FLOWER（花）

2F ／ PENGUIN BOOTS（缶バッジ・ファッション）、スロメ（シルクスクリーン印刷）、Lucca445（ギャラリー）、Pisara Toivoa（アクセサリー）、日常茶飯（イラスト）

ロイヤル40 ヨンマル

住 岐阜市日ノ出町1-20 ロイヤルビル（P29地図B-4）
営休 店舗により異なる
Instagram：@yonmarunikai

1. PENGUIN BOOTSでは自分で生地を選んで缶バッジを作ることもできる　2.アイスクリーム松ノ屋の「もなかアイス」は、食べ歩きにも最適。名物の「ばくだんアイス」もぜひ 3.オリジナル家具やインテリア雑貨が揃うSIKAKU／四角商店。家具はオーダーメイドも可能　4.らせん階段を上がって2階へ

★ 特集で紹介したお店からプレゼントあり！ 詳しくはP30をご覧ください。

Renovation ❷

公園に新しい魅力をプラスして
人が集まる場所へと再生。

各務原市

KAKAMIGAHARA STAND ／かもす食堂

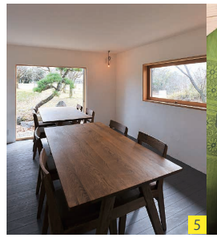
各務原市にある都市公園「学びの森」。芝生広場や大小の池、並木道などを備えたこの場所は、毎年11月3日に催されている「マーケット日和」の会場として知られている。「イベントの日以外にも普段から人が利用したくなる価値を生み出したかったんです」。そう話すのは、まちの魅力の発信やまちを楽しむきっかけの創出をテーマにイベント運営や地域連携事業を展開する一般社団法人「かかみがはら暮らし委員会」の代表理事、長縄尚史さん。

平成28年、公園内にもともとあった喫茶店を、暮らし委員会のメンバーたちとスタンド式カフェ『KAKAMIGAHARA STAND』へとリノベーション。

すると、カフェを目当てに訪れる親子連れが公園を行き交うようになるなど、少しずつ変化が現れた。さらに、次なる展開として公園に隣接する場所にあった築54年の空き家に注目。「畳や縁側があって、垣根を切ったら公園が一望できて。こだ、と思いました」。『かもす食堂』として改装し、昨年10月にオープン。日常的に利用してもらえるようにと、丁寧に取っただしや、全国から取り寄せる調味料を使った〝ひと手間かけた普通のごはん〟は、しみじみ美味しいと近隣のお年寄りにも評判だ。

そのほか、カフェでは〝寄り合い〟と呼ばれる交流会、食堂では食にまつわる講座を開催し、人と人との交流拠点としての役割も果たす。訪れた人は公園を眺めて食事をしたり、飲み物を買って芝生で休んだり、交流会でまちを面白くしたい仲間と意見を交換したり。公園の来園者や滞在時間の増加はもちろん、訪れた人と住民との繋がりまでも生み出した。

行政との連携も助けになったと長縄さんは言う。市のDIY型空き家リノベーション事業を利用することで、地域の人に解体に参加してもらったり、開店時に近隣住民へ声かけをしてもらったり。長縄さんら民間が〝公共の場を面白くしたい〟と企画し、それを市が承諾し支える。これにより、地域を巻き込んだ動きにまで発展し、〝緑豊かな公園〟は、〝まちを楽しむ人が集まる公園〟へと役割を変えた。「まちで楽しみたいと思う人が集まり、増えていけば、各務原市はもっと面白くなると思います」。まだまだ眠っている、このまちの面白さ。次にそれを見出すのは、あなたかもしれない。



1.一番右がかかみがはら暮らし委員会の長縄尚史さん。「気持ちの良い公共空間ができることで、まちの暮らしが楽しくなるはず。各務原ならではの思い出を公園で作っていってほしいですね」 2.『KAKAMIGAHARA STAND』は、クラウドファンディングで集まった多くの協力金が改装費用を支えたそう 3.4.5『かもす食堂』の温かい雰囲気はリノベーションならでは。 2種類の定食の内容は月替わりで、滋味深いほっとする味わい。本日のお昼ご飯1,300円（税込）～

KAKAMIGAHARA STAND
かかみがはらスタンド
住 各務原市那加雲雀町10-4 営 10:00～19:00（LO18:30）
休 木曜 ☎ 058-389-8979 P あり（3時間無料）
https://kakamigaharastand.com/

かもす食堂
住 各務原市那加桜町3-202-2
営 11:00～ LO14:00
休 木曜 ☎ 080-3453-8917
P あり（3時間無料） https://kamosu.space/

1.宿泊は1階の和室や洋間の4室が利用でき、料金は一棟貸切（定員6名）33,000円＋1名ごとに6,000円（税・サ込）～。詳細はWEBサイトにて 2. 宿には岐阜市ゆかりの熊谷守一の版画や松原日沙史の日本画のほか、現代アート作家の作品などもさり気なく飾られている 3.「今は設計などの手は休めて、地域をデザインすることに入れ込んでいます」と笑う近松さん

Renovation ❸

鵜飼文化や長良エリアの
魅力が体感できる宿や拠点を。

岐阜市

鵜飼楽屋／&n

昨年5月、長良川右岸に一軒の宿がオープンした。築101年を数える家屋をリノベーションした『鵜飼楽屋』だ。住宅や料亭が立ち並ぶ細い路地にあり、一見すると普通の民家のようだが、玄関をくぐった先には、建物の歴史を確かに受け継ぎながらもモダンに整えられた上質な空間が広がる。古い土壁を一部に残し、天井や壁を岐阜県産材の長良杉や東濃ひのきに張り替えた洋間。現代アート作家としても活動する庭師が手掛けた意匠を凝らした庭。春のやわらかな日差しが縁側に注ぎ、ゆるりと贅沢な時間が流れる。

建築家の近松慶孝さんは2年半程前に偶然、大正7年に商家として建てられ、ここ20年程は空き家になっていたこの建物が取り壊されることを知った。「葺き替えられた屋根やしっかりした柱などの木材を見て、大きな改修をしなくてもこの建物はまだ活かせると分かりました。それならば、壊してしまうのはこの地域にとって勿体ないと思ったんです」。

実はこの長良エリアは近松さんが高校時代を過ごした想い入れのある場所。さらにこの辺りは鵜匠が鵜とともに暮らす家があり、船頭が鵜籠を担いで行き来する〝鵜飼の里〟でもある。「夕方には岸辺の鮎焼き船から、鮎を焼くいい匂いや煙が漂ったりね。観光客が観覧船に乗る対岸の川原町周辺が鵜飼の表舞台だとすると、この地域は〝楽屋〟。でも、僕にとってはここでの鵜匠さんや船頭さんの日常の方がリアルだし、実は鵜飼を支えているのはそういう生活文化だと思うんです」。この場所に宿があれば、宿泊客がこの地域を散策して鵜飼を支える日常の営みに触れられ、その後の鵜飼観覧も単なる観光とは全く違うものになるのではないか。熟考の末、近松さんは思い切って建物を譲り受け、宿を開いた。

現在は近隣に住む地元のメンバーと「長良川リバースケープLLP」という組合を立ち上げ、材木倉庫だった建物も改修中だ。長良エリア散策の拠点となる施設『&n』は5月に完成予定で、ワインバーや花屋、家具屋などがオープンし、川遊びやカヤック体験も始まる。「今後は&nと連携した宿泊者のガイドツアーや、地域の人に宿をゲストハウスのように利用してもらうイベントも企画したい。いつかはアートツアーやエコツーリズムも」。子どものように目を輝かせる近松さん。構想は尽きない。

鵜飼楽屋 うかいがくや
住 岐阜市長良39-4（P29地図E-1）
営 チェックイン15:00～、チェックアウト11:00
休 12/31～1/3 ☎ 050-3695-2447
https://ukaigakuya.com/

&n アンドン
住 岐阜市長良45-1（P29地図E-1）
※2019年5月11日に
グランドオープン予定
http://and-n.info/

Renovation 4

みんなが集う、まちの寺に
ほっと安らげる宿坊カフェを。

関市

カフェ・茶房 宗休

関市の市街地を一望する高台にあり、日々多くの参拝客が訪れる「関善光寺」。その境内にある建物が今年3月、近所で焼き菓子が評判のカフェ「CAFE ma biche（マビッシュ）」のプロデュースで、宿坊カフェ『宗休』として生まれ変わった。

平成21年にこの寺の住職となった佐藤舜海（しゅんかい）さんは当時、急激に檀家の寺離れが進み、寺を訪れる人が減っていく様子を目の当たりにして、その未来に危機感を抱いていた。「もっと皆さんに来ていただくために、何かできることはないか」。佐藤さんは住民にも協力を仰ぎ、有志のメンバーで境内を会場としたイベントを主催するなどして、寺を盛り上げようと尽力。寺は徐々に地域に身近な存在となっていった。

そんな中、参拝者から「境内にゆっくりできるカフェがあるといい」という声が寄せられるように。しかし15年ほど前まで茶屋として使われていた建物は、今や物置といった状態。ボランティアらが手入れをしていたが劣化も目立ち、実際に店を運営する人手も見つからなかった。そこで力になってくれたのが、「CAFE ma biche」のオーナー、亀山久美子さんだ。「ご住職の頑張りは話に聞いていて、何かできることがあればと」。亀山さんはその頃、かつて働いていた飲食店の同僚と偶然再会する。寺のカフェ運営の話を持ち掛けると、「店長として頑張りたい」という嬉しい返事があった。

こうしてオープンに向けて本格的に始動。改装は亀山さんの知り合いの大工が担当し、カフェスペースは寺の雰囲気に馴染むよう、素朴で和の風情を重んじた装いに。「宿坊体験もできたら面白いんじゃないか」という佐藤さんの発案から、奥の部屋は宿泊できる客室へと姿を変えた。

1

カフェで味わえるのは、みつ豆やぜんざいといった甘味のほか、毎日手間暇かけて仕込むランチ。塩糀（こうじ）に漬けて表面をカリッと焼いた鶏肉、季節の野菜を使ったおひたし、煮干しからだしを取る味噌汁。どれも心を込めて作られ、じんわりと体に沁みるような味わいだ。

「人が集ってこそのお寺。宗派を超えて皆さんが安らげる場所にしていきたいですね」と佐藤さん。今後は境内やカフェを活用し、若者に向けたイベントも開催していきたいと話す。人が集まり、繋がる場所。まちの寺からたくさんの縁と笑顔が広がっていく。

2

3

1.時季によって変わる惣菜がぎゅっと詰まったランチは、見た目以上のボリューム。プチデザートも付く。お昼ごはん／1,280円、みつ豆／450円（すべて税込）　2.「カフェができたことで、より多くの人がお寺に来てくれるようになれば」と2人　3.眺めの良い客室からは美しい夕日が望める。宿泊は1日1組（6人まで）限定で、鐘撞（かねつき）と朝の動行が体験できる。オプションで座禅、写経なども。宿泊予約は3月末から受け付ける予定。宿泊についての問い合わせは「CAFE ma biche」（TEL.0575-23-6353）へ

カフェ・茶房 宗休

住 関市西日吉町35
営 10:00〜17:00
休 火曜、第1水曜　☎ 0575-46-9739
P 共同30台

関善光寺

住 関市西日吉町35
拝 9:00〜17:00
☎ 0575-22-2159　P 共同30台
https://www.seki-zenkoji.jp/

岐阜市

やながせ倉庫

つくる人を育てる"ヘンな場所"が
柳ケ瀬に"面白い"を生み出す。

むき出しのコンクリートや、迷路のように続く通路。『やながせ倉庫』に初めて足を踏み入れると、誰しもその混沌とした雰囲気に戸惑うことだろう。建物3つが繋がるこの不思議な空間に、カフェや古着屋、雑貨店、作家のアトリエなど21軒がひしめき合う。「気づいたらこんな"ヘンな場所"になっちゃったんだよね（笑）」と話す管理人の上田哲司さんこそが、約14年前、空きビルを活用するという概念がまだ浸透していなかった時代に、この古びた建物を自らの手でユニークな場所へと作り変えてきたリノベーションの先駆者だ。

上田哲司さんと、その右腕として「古道具mokkumokku」を管理するしっかり者の娘の沙奈さん。仲良しな2人は笑顔もそっくり

もともとこの建物は、上田さんの祖父が昭和34年に建てた雑居ビル。当初はラーメン屋やスナックが入っていたが、撤退が続き空きビル状態になっていた。それを引き継いだ上田さんは、何とかして楽しみながらビルを活用したいと模索していた矢先、クリエイターを集めたビルにしては、とアドバイスを受ける。「クリエイターってよく分からんかったけど、何となく面白いんじゃないかと思って」。平成16年、6室の入居者とともに『やながせ倉庫』はゆるりとスタートした。

「好きな時に、好きなように店をやってほしい」が上田さんのモットー。家賃は格安、営業日と営業時間も自由。驚くほどゆるい条件は、ものづくりをする人々にとって思い切って店を構える大きな後押しとなった。入居者が増えるたび、上田さんは工具を握り、柱や壁、天井を壊しスペースを拡張。入居者と協力しながら内装を作り上げた。次第に"個性豊かな店が集まる面白い場所"として知られるようになり、県内のみならず県外にも続々とファンが増えていった。

「最初は正体もよく分からなかった入居者が、どんどん力と自信を付けていってね。面白いし、嬉しいよ」。自由なスタイルとおおらかな管理人のもとでのびのびと育ったクリエイターの中には、柳ケ瀬の内外へと巣立ち、活躍の場を広げた人も多い。

『やながせ倉庫』が満室となった今、次に上田さんが考えるのは、柳ケ瀬で使われていないビルや建物の活用。平成29年に開いた「やながせ倉庫南館」はその第一歩だ。長年シャッターが閉じていた「みのしげビル」の1階を改装し、レトロな家具や食器などの古道具を扱う『古道具mokkumokku』を構えた。「シャッターが閉まってるのは寂しいからね。いつ来ても柳ケ瀬が楽しい商店街になると嬉しいなぁ」。

やながせ倉庫

住 岐阜市弥生町10（P29地図B-4）
営 12:00〜19:00 ※店舗により異なる
休 店舗により異なる　☎ 058-265-2123
http://yanagasesouko.com/

古道具mokkumokku

住 岐阜市柳ケ瀬通 2-24
やながせ倉庫南館（P29地図B-4）
営 12:00〜18:00　休 水・木曜
☎ 058-214-3113　http://mokkumokku.net/

噂のリノベカフェへ 出かけてみよう!

山間に佇む
憩いの喫茶店

美濃加茂市

喫茶 つみき

自然に囲まれたのどかな集落にある喫茶店。新聞を片手にモーニングを味わうお年寄り、人気のランチに会話を弾ませる主婦。若い客が遠方からもふらりと訪れ、築70年の民家を改装した店はいつもにぎやかだ。3年前に家族とこの三和町に移り住み、周囲の人たちの温かさに触れ、この地域が大好きになったという都竹祐樹さん。名古屋や岐阜の飲食店で修業を重ねた彼が作る、近所の親しい農家が育てた地元野菜をふんだんに使ったサラダやキッシュ、地鶏のソテー。どれも滋味深く、一口ごとに元気が湧く。「たくさんの人に支えてもらってできた店。ここを、地域の魅力を伝える拠点にしたい」。みんなが憩うこの場所で、その夢はゆっくりと叶いつつある。

住 美濃加茂市三和町川浦1503-4
営 9:00〜16:00
休 木曜、日曜、祝日　☎ 0574-50-1330　P 15台
https://kissatsumiki.amebaownd.com/

1.メインは肉か魚から選べ、サラダやおかず、スープなどが付く。「地元の食材の美味しさを知ってほしい」と都竹さん。つみきワンプレートランチ／1,000円（税込）　2.2階は6畳の座敷席　3.この民家に残されていたり譲り受けたりした、古いミシン台などの道具や家具を大切に使い続けている

人と文化が集まる
隠れ家カフェ

岐阜市

喫茶 星時 ほしどき

築50年を超える雑居ビルをリノベーションしたアトリエビル「カンダマチノート」。店主の樋口尚敬さんは2年前、作家やデザイナーなど多様な人々の価値観が混ざり合うこのビルをひと目で気に入り、2階にカフェを開いた。岐阜公園近くの「YAJIMA COFFEE」に焙煎を依頼する「オリジナルブレンド」は、3種類の豆の個性が際立ちながらも、すっきりと爽やか。自ら手作りするケーキやタルトなど、スイーツの評判も高い。「人が集まる空間が好きなんです」と樋口さん。演劇やヨガ、写真など幅広いジャンルのイベントも精力的に開催する。同じ好奇心を持つ客が集い、ともに時間や文化を楽しむ秘密基地。ここはいつでも新しい刺激に満ちている。

住 岐阜市神田町3-3 加藤石原ビル2F（P29地図C-4）
営 11:00〜20:30（LO20:00）
休 水曜、第4木曜
http://hoshidoki.jugem.jp/

1.ふわっと口溶けの良いチーズケーキと丁寧にハンドドリップしたコーヒーの相性は抜群。オリジナルブレンドコーヒー／480円、スフレチーズケーキ／450円 ※ケーキセットは50円引き（すべて税込）　2.店内には樋口さんが趣味で集めるリトルプレスも並ぶ　3.細い階段の先に入り口が見える

1.カレーは月替わりで2種類の味が楽しめる。写真はチキンとエビ。カレー／1,000円 ※ドリンク・ケーキセットは＋500円（すべて税込）　2.2階は親子専用のスペース。バランスボール教室など母親が交流できるイベントも随時開催　3.1階にはカウンター席もあり、1人でも立ち寄りやすい

親子でゆったり
くつろげる店

美濃市

美濃市駅前カフェ 灯家 あかりや

20年以上も空き家だった民家を約1年がかりで改装して生まれたカフェ。もともと東京のメーカーで海外営業を担当していた西潟洋一郎さんは、「もっと子どもと過ごす時間を増やしたい」と脱サラ。美濃市に移住して岐阜県森林文化アカデミーで学ぶうちに、リノベーションや地域活性への興味が膨らみ、妻の高代さんとともに“親子でくつろげる場所”をコンセプトにした店を開くことを決意した。20種類以上ものスパイスを駆使して作るインドカレーは、これを目当てに遠方からファンが訪れるほど本格的な味わい。乳幼児や幼児が食べられるメニューも揃う。暖かい日差しに包まれた穏やかな空間には、いつも親子の笑い声が響いている。

住 美濃市2951-1
営 火・水・木曜の11:00〜17:00 ※祝日の場合は休み
☎ 0575-29-4171　P 近隣に市営駐車場（有料）あり
https://mino-akariya.jimdo.com/

1.土・日曜限定の「昼のおもてなし」には、羽釜炊きのご飯と地元食材のおかずや、手打ちそばのメニューも。石臼挽きそば粉のガレット／850円、ゆず茶／500円　2.平日は10時からコワーキングスペースとなり、利用料金はワンドリンク付きで1時間500円〜終日1,500円（価格はすべて税抜）

古民家を再生した
コワーキングカフェ

関市

そばのカフェおくど

東京出身の中田誠志さんは、田舎暮らしをしたいと8年前に家族で岐阜に移住。地域おこし協力隊の活動を経て、地域プランニングの仕事を始め、関市下之保に事務所を構えた。そこで市の空き家バンクから築140年以上の豪農屋敷を紹介され、1年かけてリノベーション。誠志さんが手打ちするそばや、妻のゆう子さんが“おくど”（かまど）で炊くご飯と地元食材で作るおかずなどが楽しめる古民家カフェとして再生させた。ユニークなのは、平日はパソコンなどを持ち込んで仕事ができるコワーキングスペースとして開放されていること。自宅でも職場でも単なるカフェでもない、“フォースプレイス”。そこには日常と旅の間のような心地良さがある。

住 関市下之保1119-1
営 8:00〜17:00（モーニングは8:00〜10:00）
休 火曜、祝日　☎ 0575-49-3117　P 10台
https://www.soba-okudo.com/